



TITLE:

東亞民族の形成

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 東亞民族の形成. 經濟論叢 1939, 48(1): 38-55

ISSUE DATE:

1939-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131199>

RIGHT:

經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十四年一月一日

第一號 昭和十四年一月一日發行
六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

(禁轉載)

目次

作田莊一博士肖像……………	卷頭
作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……………	一
日本の學問の文化史的意義及び基本的諸典型……………	文學博士 米田庄太郎……………三
東亞民族の形成……………	文學博士 高田保馬……………六
日本經濟史研究の發展……………	經濟學博士 本庄榮治郎……………五
理論學としての日本經濟學……………	經濟學博士 谷口吉彦……………四
產業組合の耕地管理……………	經濟學博士 八木芳之助……………三
印度に於ける國民的產業能率の遲滯性に就て……………	經濟學士 大塚一朗……………二六
「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……………	經濟學士 中川與之助……………二五

資本主義と支那事變……………	經濟學士 柴田 敬……………	一四二
明治時代農村手工業の消長……………	經濟學士 堀江 保藏……………	一五二
我國に於ける預金通貨統計の發達……………	經濟學士 中 谷 實……………	一六八
保險思想の發展……………	經濟學士 佐 波 宜平……………	一七三
歴史學派に於ける國民經濟の概念……………	經濟學士 白杉庄一郎……………	二二一
日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……………	經濟學博士 石川 興 二……………	二二七
國事資金法の提案……………	經濟學博士 小島昌太郎……………	二四九
農山漁村財政の五箇年記錄……………	經濟學博士 汐 見 三 郎……………	二六九
支那の社會成層……………	法學博士 財 部 靜 治……………	二八八

東亞民族の形成

高 田 保 馬

戦争は事物の進行を短縮する。例へば日本の産業の發達は、これを自然の進行に委せたならば、重工業への轉換のために少くも二三十年を要したであらう。それが僅に二三年のうちに略ぼ實現されるといふことは、何といつても日支事變の力である。私のこゝに述べようとする東亞民族の形成とても、何れは歴史の進行とともに實現せらるべきことではあつたにしても、それは事變の作用によつて、近い將來に於けることがらとなりつゝある。

今や、支那海は一の湖水と化してゐる。此湖水の東にある日本列島は、よし地理學的には離れ離れの小島にすぎぬにしても、社會的には人口一億に近く、東西の文化の融合を實現しつゝある大陸地である。朝鮮臺灣の二海峡は飛行機と艦船とにとつて海水を征服した地峡である。かくて日本は今亞細亞の東端と一帯をなしてゐる東亞地域を構成し、その中に黄色の水の南北支那海を湖水としてたゞへてゐる。日鮮滿支蒙の諸民族は此意味に於て共同の地域によつてつながれてゐる。以前から日支の兩民族を稱して、同種同文であるといつたが、五の民族とてもさうである。而も彼等は同域といふことによつて結ばれてゐる。かくて東亞の諸民族は、同種、同文、同域

といふ三同の紐帶によつて維がるべき宿縁をもつて、今日極東に位してゐる。

理性の狡計といふことに屢々思ひ到る。日支事變の當初に於ては滿洲事變の跡始末以上のことを考ふるものは少かつたらう。北支に緩衝地帯を作つて滿洲國の治安を確保し、進みては北支に日本の商權を確立する。これ位のことゝが國民の目標であるかに見えてゐた。けれども、日本の事變不擴大、戰區局限の方針にも拘はらず、支那は其民族主義に驅られて、戰局擴大徹底抗日の方針をとり、遂に今日の如く全支那の大半をあげて戰亂の巷となすに至つた。而して、當初消極的であるかに見えた日本の目標を勢ひ、單なる商權確立、北支の治安維持をこえて、全支那の運命に置かねばならぬことにした。勿論、東亞諸民族の提携聯合といふことは、早晩は日本の責任として、その上に課せらるべき職分であらう。たゞそれが急速に當面の課題として日本民族の前にあらはるゝに至つたのは、一に支那の徹底的抗戰の態度の結果である。日本は當初戰爭への深入をさけてゐたにも拘はらず、遂に今日の事態にまでふみこまざるを得なくなつた。その結果、今や、北支の商權獲得の如きは決して事件の中心をなす問題とならず、好むと好まざるとに論なく、日本は今や東亞諸民族の運命を自己の責任に於て、自己の運命として考へざるを得ざるに至つた。世界の理性は支那民族の對日的激情をかり立つることによつて、歴史の齒車を急速に回轉させたのである。

東亞の諸民族、従つて日滿支の諸國民はそれ／＼一の民族をなすとともに、また相合して、廣義に於ける一民族、即ち東亞民族といふ超民族を形づくる。これは單なる思想の假構に非ずして、與へられたる現前の事實であ

る。一面に於てそれは所謂生命共同社會である。いはゞ身體的生理的に即ち種的に相近い。その間に種々なる分派はあるにせよ、之を白人、黒人に對するとき全く同一の種に屬するものとして、外貌の上に差異を見出すことは、われら自身にとつても屢々困難である。淡いとはいつても、血がわれらを結びつけてゐる。その上、各國をたてゝ幾千年の年數をへてゐるにせよ、其間近隣の地域にすみ、別して最近は交通機關の發達と共に互に密接なる接觸を保つに至つてゐる。いはゞ共同の地域にすみ、共通の地縁は共同社會の結束を愈々親密ならしめる。その上に、文化の共同が各民族を結びつける。勿論言語は同じくない。われらのそれと支那のそれとは、文章の構造に於てすら全く相違すといはれる。けれども、思想の内容や風俗、信仰、習慣、これらのものを通じて双方は著しく相似てゐる。此文化は自ら一種の共同社會を作り上げる。上に述べた三同の紐帶は、廣義に於ける東亞民族を支持するに十分なるものである。此意味に於て、現に東亞民族がある。それは期待せらるべき將來の事實であるには止らぬ。

二

けれども、東亞民族は單に與へられたる事實として認めらるゝに止らぬ。それはまた將來に於て實現せらるべき課題である。與へられたるまゝの東亞民族は上に述べたるが如き紐帶によつて自ら成立してゐるところの結合である。意識の表面に於ては抗日の反感がうづまき、過去の戰禍による不快の感情が顯著であらうとも、其底流にはかゝる自らなる親和が各民族を融合せしめる。たゞ世界の狀勢が東亞の諸民族に強ひつゝあることは、この

自然なる超民族的結合を自覺にまで上せ、その強化と發展とを意志的に追求することである。東亞民族の團結が現實に於て支配的のものとなり、東亞の政治と經濟と文化とがすべてこれを樞軸として動き、それを目標として進むことである。

何故にさういふか。世界各國の政治に於て民主制が勢を得るに及び、國際間の關係に於ても、それが適用せられ、所謂民族自決が主張せられた。けれども、要するにこれ一の空想である。對立角逐の世界の舞臺に於て各國家は仁者として立つものではない。劣弱微力の各民族が自決の美名の下に獨立の國家を形成したとしても、衰亡は必至の運命であり、生きむとするならば合併乃至聯合を計る外に道はない。國際間の競争は愈々大規模のものとなる。此間にあつて、自己を維持し發展を確保する爲には、一定の條件を要する。條件とは人口に於て、資源に於て、文化に於て、産業に於て、所謂大國であることである。弱小の國家は大國の勢力均衡の蔭に依存する所の不安定なる、恐くば性質上一時的なる存在に外ならぬ。而もかかる狀勢の下にあつて、東亞の各民族は現在如何なる地位にあるか。

東亞が幾百年間、壓迫の對象であつたことについては、今何事をも述べる必要はない。白人の世界制覇既に四百年、強者は常に強きことの故に弱まらざるを得ず、物質文明の急速なる上昇は出生率の減少、團結の弛緩を來しつつある。これが彼等の將來にとつて何を意味するかは私の屢々説きたるところである。被壓迫者の解放は人類の大義であらうし、文明の交代は歴史の鐵則である。世界文化の發達の經路についてはしばらく論ぜず、人類

平等の原則の地上に於ける實現に向つて一步を進めることは、今や東亞の諸民族に課せられたる一の歴史的義務であり、又運命的なる責任である。而も今日の狀態から見ると、列國對峙の中にあつて、十分に自己の存立を主張しようとするについては、一定の資格を有する。而して歴史が加ふところの此資格の審査は愈々嚴密を加へようとする。此點に於て恐らく東亞の各民族は區々に孤立して、現状からの解放、地位の上昇といふ使命を果し得ないはずである。況や一の民族が他の民族を排侮し、共同の壓迫者とも見られうるものと結ぶが如きに至つては、これ全く其民族の歴史的使命を無視するものといふべきではないか。

弱きものに與へられたる武器はたゞ其結束にある。四百年間の雌伏の狀態から立上つて、「人類の種々なる部分が壓迫せらるゝことなき平等の地盤」を作らうと思ふならば、何よりもまづ、東亞の諸民族が結束して自己を防衛するに若くはない。又此結束以外に目的を果す道はない。東亞諸民族の共同防衛、これは自明の義務であるとともに、其自覺の内容でなくてはならぬ。三同による東亞の結合は與へられたるものである。其共同防衛とこれによる平等の實現は課せられたる使命である。此意味に於て、此自覺せられたる使命による超民族的團結は、好むと好まざるとに拘はらず、東亞の前途そのものである。

東亞の自覺的な結束は勿論一方に於て自己の防衛を目標とするけれども、それは決して東亞の利己主義のためではない。それは人類平等の大義を實現せむが爲であり、世界を白人の世界から人類の世界、少くも白人と黄人の世界に轉化せしめるが爲である。けれども、この結束そのものは事決して容易ではない。勿論、團結の紐帶はすべて與られてゐる。しかし、歐米資本主義諸國は利益を以て之を引き離さうとし、又古來以夷制夷を以て國

民性又は、傳統的政策とする支那の立場はそれをうけ入れようとする。加ふるに、此度の事變に於ける種々なる事實の記憶は、同様なる方向に作用するであらう。そこに東亞民族としての課題の實現は、相當の困難に打ち當る。それだけではない。假に支那の方針を完全に東亞の結束といふ方向に轉ぜしめ得るにしても、そこには經濟と文化との工作の上に極めて多くの困難をはらむ。

三

東亞を以て一の地域的運命協同體と見る見方がある。此見解は東亞の社會的性質を見誤れるものである。まづ東亞を以て運命協同體であるといふ、それはシツクサアルゲマインシャフトの譯語ではないか。これはオオストリアのマルクス主義者オットオ・パウアアが民族の本質（運命共同體としての性格共同體）として掲げ出せる概念である。第一に、若干の追隨者はあるにしても、パウアアの意見として以上、別に學界共同の承認を得てゐると思はれぬ言葉をすてゝ、何故に卒直に民族の言葉を用ひないのであるか。何故に支配的でもないマルクス主義者の概念を輸入しなければならぬのであるか。次に東亞は如何なる意味に於ても現在まで運命協同體であつたことはない。運命の共同は共通の宿命ことに共同の史的遭逢の中にのみ存する。隔離對立を原則的狀態とした日支の間如何なる運命の共同があつたといふか。次に、それは東亞が實現すべき課題を示さうとしたといふことであるかも知れぬが、それでは全く本末を顛倒してゐる。求むるところは東亞の團結であらう。ところが、運命協同體であるがゆゑに結束するのではない、團結あるがゆゑに運命の共同があり、此共同によつてまた結束が新にせらるゝはずである。パウアアすでにいへるやうに運命の類似又は同様性といふことと、運命の同一又は共同とい

ふこととはことなる。運命の共同はたゞすでに強き結束があり、團結の中に「我等」といふ意識があることによつてのみ、體驗し得られる。日支の各民族がかゝる運命の共同を體驗しうるのは決して近き將來のことではない。それは東亞の結束の進行したる結果のことである。それは目ざすべき目標の一結果であるものを目標そのものとして見るのではないか。次に、東亞の結合を地域的運命協同體と見ることは、其重點を逸してゐる。東亞の團結を運命協同體と表現することの不可なる所以は既にこれを述べたが、之を何よりも地域協同體として示すことに疑問がある。地域協同體であるといふならば、何故に東西比利亞の露人を入れないのか。私は東亞の結束に於ける地縁の意義を認めぬわけではなく、幾たびかこれに論及してゐる。けれどもそれを以て、最初に代表的なるものとして掲げ出さるべき紐帶であるとはなさぬ。これを掲げるならば、何故に同種同文の紐帶を重じないのであるか。同文といふことは、必ずしも文字の同一を意味するのではない。慣習、風俗、信念、學問等に於ける一致、いはゞ文化の共通を意味すること、前に述べたる通りである。東亞の團結をあらはすに地域・運命協同體といふのは、最も根本的な血液的乃至種的の紐帶を輕視して（歐洲の學者或は日本を支那の從兄弟であるといふ）文化の類似といふ極めて重要な契機を忘れようとするのではないか。これらをすべて地域的紐帶のみを重じ、結束の結果乃至一面にすぎぬ運命共同を掲げ出すことによつて、東亞の結束が適當に表現せられ、又は理解せらるゝことはあり得ないと思ふ。

序であるが、シツクサアルゲマインシャフトの譯語として、運命協同體の語は不適當である。協同の協は「かなふ」「あはせる」「やはらぐ」を意味する。それぞれ獨立なる、複數のものの調和を意味する。然るに、運命に

よるゲマインシャフトは前にも述べたるが如く、遭遇する運命が同一であることをさす、彼のであへる運命はやがてわれの運命であり、われの出あへる運命はやがて彼の運命であることに外ならぬ。それは運命共同体であるが、運命協同體ではない。勿論かゝる字句乃至譯語のことは末であるが、何れにしても、東亞を運命協同體とすることは、少くも學問的に不適當であると思ふ。

私は前に述べたるが如く、東亞を根本に於て維ぐものは三同の紐帶であると見る。けれども、これらの紐帶はいふまでもなく以前より存在した。従つてそれによつて成立してゐたものは、セエラアの意味に於ける生命共同社會としての東亞であり、その上に文化の共同にもとづく結合、いはゞ文化共同社會が加はつてゐたとも見られよう。何れにせよ、それは未だ眠れる東亞である、三同の紐帶の作用がよびさまされねばならぬ。これが爲には當然政治的なる組織を必要とする。日滿の關係は此の如くにして生れた。而して日滿支をつなぐ所の政治的連絡云はゞ新しい秩序が生れねばならぬ、否それは既に戰亂の巷の中から生れ出でつゝある。

四

東亞民族は興へられたるものとしてある。けれども、それは同時に自覺せられたる組織にまで高まらねばならぬ。これを高むる所以の機縁又は動力は何であつたか。いふまでもなく、日本民族の自衛の必要であつた。日本は出來うることならば單獨の自力を以て其民族的生命を衛りつゞけようとするであらう。けれども、その人口を以て、その資源を以て、その富力を以て、要するに現在の日本だけの力を以て、之を成し遂げ得るといふことは必ずしも保證せられぬ。加之、將來の協力の相手と見るべき近隣の諸民族が、日本に對する壓迫者と手を連ねよ

うとする。自衛と正當なるべき協力との爲には手を隣族に伸ばさざるを得ず、拒絶せらるゝならばこれを強ひざるを得ぬ。これだけは日本の民族が自衛の爲になさざるを得ざるところである。而も此の自衛のための活動はやがて、東亞に新なる組織を生むべき状態を招來した。

たゞ東亞民族の宿命的地位をまづ考へよう。而してこの地位に於ける日本の使命の何であるかを考へねばならぬ。これを考へずしては、新しき東亞の組織を具體的に考ふることに、全く不可能である。或は日滿支の國際的な結合を云爲し、日滿支の經濟ブロックを云爲するものはあるが、其内容は如何なるものであるか。各民族の協心、合作といふことだけからは、何物をも規定することが出來ぬ。

東亞民族は歐米の資本主義諸國に對して自己を主張しなければならぬ。これは人類の義務である。而も、この主張が有效であるためには、日本が有力であるより外はない。私は孫文の古い言葉を引用しよう。

『今日では亞細亞に強國日本が存在するので、世界中の白人種は單に日本を輕視しないのみならず、又亞細亞人を輕視しなくなつた。その故に、日本が強力になつたことは日本民族が一等民族であるといふ光榮を享受したのみでなく、亞細亞全體の國際的地位を高めたわけである。』

有色人のうち、自らたちて白人に抗しうるものは抗しなければならぬ。此旨をかつて述べたことがある。同様に、東亞民族のうち、自ら自己を主張し得るものは、徹底的に自己を主張すべきである。それは一民族を向上せしむるのみならず、東亞の諸民族を向上せしむる所以である。此意味に於て、東亞の各民族の爲に計るにしても、東亞の新秩序によつて日本の地位を危くすることがあつては、この歴史的使命に背く。他の東亞諸民族が完

全に日本民族と一心同體的なる協力をなすに至る保障の與へらるゝまでは、日本民族は單獨なほ資本主義先進國に對して自己を主張し得ることが、他の諸民族を救ふ所以である。來るべき組織の方針はこゝに存しなければならぬ。次に新しき組織は、東亞民族の結束を出來るだけ急速に、自發的ならしむる方向に向はねばならぬであらう。對外自衛の必要に最もよく應ずる爲に、次に對内の結束を最も容易にする爲に。これが重要な二の目標である。

此目標に照して來るべき政治の組織の如何なるものであるかを見よう。今や支那の各地に若干の大都市を中心とする政權が確立せられつゝある。これらは、近き將來に於て、邦聯自治の組織をとることになるであらうといふ。これと滿洲國、蒙疆との關係如何。人間の意志を以て計畫し豫斷するよりも實際の必要によつて、事態は自らを創造してゆく。それによつて落ちつく先は結局日滿支の共同防衛の組織である。これは決して單純なる攻守同盟的組織であることは出來ぬ。如何なる形式の政治的聯絡が作り上げられようとも、それは實質に於て共同防衛の爲の組織であり、而も此防衛の究局の責任が少くも當分は、日本民族にふりかゝるものであることを要しよう。日本民族の責任に於て支持せらるゝ共同防衛の組織、これが東亞の明日の姿であると思ふ。これは從來の歴史に從つて速斷するとき、或は日本の壓迫のやうに見えるかも知れぬ。けれども、他の機會に於て述べたるが如く、これは己を得ざる分業の組織である。第一に今までの史實から見ると、外部に對する防衛、對内防衛としての治安の維持に於て、日本民族が特別に優秀なる能力を示したばかりではない。新しき東亞民族の内部に於て、黨分動もすれば民族的對立が残存すると思はれるし、此對立によつて全東亞の對外的自衛能力が減殺せらるゝ危險

の存する以上、一應自己の勢力を以て統一を實現し得る民族が、前述の機能を負擔するのも自然の成行であるといはざるを得ぬ。此意味に於て、東亞民族に於ける一の分業として、日本民族が國防的政治的仕事の主要なる部分を負擔する。

これがある點まで具體的に考へ得るであらう。滿洲國の政治機構に於て日本が如何なる役目を營みつゝあるかは、周知の事實である。北支、中支、やがては成立するであらう南支の政權に於ては、大體その地方の自治會からたち上る權力を以て政治の運用に當らせようとする組織になつてゐるかに見られる。外形はそれでも仕方のないことであらう。けれども、これとても、日本の占據地域のことである以上は、その政權が究局に於て日本の武力を背景としてゐないことはない。従つて此究局の背景が十分の發言權をもつ組織でなくては統治の實をあげ得ぬはずである。此意味に於て、日本民族との提携親和が支那民族の衷心の態度となるまでは、政治の組織といへども、滿洲國と極度の距離をもつものではなく、日本はそこに於て十分に指導的地位を確保しなければならぬと思はれる。最初の方針として、占據地域に於て次ぎ次ぎに軍政を布くべきであつたといふ意見のあることも、十分に参照せられねばなるまい。

要するに、東亞のための東亞は、世界が認めなければならず、また東亞自體が認めねばならぬ目標である。けれども、だからといつて、東亞各民族が各其世界的使命を十分に自覺するまでは、決して單に支那のための支那であつてはならず、日本の爲の日本であつてはならぬ。東亞のための支那であることを要し東亞の爲の日本であることを要する。その爲には經濟に於て分業がある如く、防衛秩序の組織に於ても分業あることを要する。前述

の理由によつて、日本の民族は防衛秩序の方面に於ける主要の責任者として立つことが、此分業の原則を實現する所以である。東亞各民族の自發的な調和協調が完全に近い時に及びて、支那は支那の爲の支那であらうし、日本は日本の爲の日本であり得るであらう。日滿支三國間の國家的結合の形態については種々なる考察もあることであらう。かゝる形態はそもそも第二次的の問題である。こゝに立入ることをさけよう。

五

日本の臺灣統治は、世界の植民政策上、最高の業績であると稱せられる。政治的には完全なる秩序を示すと共に、經濟的には本島人の生活を急速に向上せしめた。これは今後の日本の進路を示してゐる。東亞友邦の指導はまさに此精神によつて行はねばなるまい。

今後に於ける對支工作は、何よりも政治的社會的であるはずである。日本は當分其武力を以て治安の責任に任ずる外はないであらうが、それにしても、支那の民心を抗日反日よりして、日本との結束にむけねばならぬことは、周知のことである。ところがこれについて二の論が分れ得る。經濟的に支那民族を有利にするといふことは其一であらうが、それには後に論及する。二論の一は、魂を以て魂によびかける親和の方針をとるのでなければならぬといふのである。「廣い地域に亘つて、家は兵火に焼かれ骨肉は戦場にたふれた。支那民族の胸中には直に親日の氣分が起り得ないであらう。日本民族は極度に寛容親和の手をさしのべて、いはゞ同胞の態度を以て慰撫すべきである。」かういふ意見をきくたびに尤ものところもあると考へる。他の一は兄弟、少くも從兄弟の民族であるから、個人間の接觸の間には魂の交流も自ら起るであらう。ことに、支那の民衆は抗日親日われ關せざる

態度であるとも考へられる。上層の抗日分子を斥け得るならば、民衆は自ら日本に向つて來るとも考へられる。従つてつとめて親近の態度に出で、妥協的工作を施すよりも、飽迄日本の意志を強行するに若くはない。私はこの二論に對して直に是非の判斷を下すことなく、たゞ考察のための資料だけを述べよう。

古來戰後に於ける交戰民族間の親和について考へよ。勢力相若くものゝ間にあつては兩者の融合統一といふことと極度に困難である。一方は一旦屈服してもやがて他方を屈服せしめ得る見込のある間、決して衷心から親和の態度をとり得ないであらう。自然の威力に對しては、よし自然の中に神の意志を認めたる時期に於ても、何人も之を怨み得ぬであらう。力が懸絶するところに怨恨はない、屈從、畏服はやがて尊敬を生み親和をうむ。此意味に於て、日支の融和を計る捷徑はむしろ強力政策にあるのではないか。別して、日本の文化的地位を考ふるときなほ更のことである。

新しき日本の文化によつて世界を指導せよとは、屢々主張せらるゝところである。言や壯なりといへども、果してどこまで實行し得らるゝか。ことを支那民族だけに限つてみよう。支那にしてみれば、ともかく儒教を生み道教を生み、日本に對しては佛教をも傳へてゐる。精神文化に於て長く日本の指導者であつたといふ自信と自恃とは當分之をすてないであらう。なるほど汪兆銘も告白してゐる如く、物質文明に於ては日本に後るゝこと六七十年とはいふものゝ、此物質文明のゆゑに日本を尊敬するといふこともありさうにはない。日本の物質文明といふものが歐米からの輸入であるばかりではなく、なほ其模倣追隨の域を脱しないことを考へてゐるからである。

當分の間、如何に日本が東西文化の融合によつて、世界を指導する文化を創造するといつても、それは抱負であ

つて現實でないとは、少くも支那民族に於ける確信であらう。さうであつて見ると、文化によつて日本民族を衷心から尊敬し推服せしむることはまづ困難であると見ねばならぬ。此際兩民族の結合を何によつて強むべきであるか。別して、日本に對する反抗輕侮の念を根本から除き去る道は何であるか。これが何であるかは、既に述べたところによつて明であらう。日本の文化に對する尊重が支那民族に於て乏しければ乏しいほど、日本はその社會的地位、ことに一方はその國際的地位、他方は支那に於ける政治的地位の優越を以て此缺を補はねばならぬ。これは決して日本の利己主義ではなく、その使命の遂行に忠實なる所以であると思ふ。

勿論これだけの主張についても、十分に考慮を要することが多いであらう。その中にも忘るべからざるは、次の點である。今まで、一概に支那の民族として、一括的に論じて來たけれども、それには種々の層があるのでないか。少くも昔から帝力何ぞ、我にあらむやといふ風に政治的勢力の推移をよそにして、たゞ日々の生活のみを考ふる農民層、それに學問を修め機會あれば政治に入りこむ支配者の層とは明に區別せらるべきである。而も抗日の氣勢は主として後者のことではないか。さうすると社會層の區別によつて、取扱の對策を異にすべきではないかといふ意見が成り立つ。固より支那民族の實情に即して考ふべきであるから、若し農民層の生活態度にして全く此の如きものならば、以上に述べたところについても、十分に制限を加へねばならぬ。けれども、國民政策の抗日政策は可なり徹底して居り、ことに小學教育を通してそれは農民層の幼少年にまで及べる事實を併せ考ふるときは、やはり一應、すべての社會層にまで抗日の空氣は、相當に根づよく滲透してゐるものと見るべきでなからうか。

六

私は更に進みて經濟を語らねばならぬ。誰しも考へてゐるところは日滿支經濟ブロックである。けれども問題は此ブロックを如何なるものに作り上げるかといふことである。たとへば北支を例にとつて考へよう。一時かういふ事が主張せられてゐたと聞いてゐる。「滿洲國に於ける經濟開發は、そこに獨占資本の流入を全然くひ止めようとした爲に、遅々として進まなかつた。北支に於ては、政治的にも日本が指導的乃至監督的地位に立つことなく、全然支那民族の自發的意志に任せると共に、經濟的にも自由に、日本の資本、中支の財閥の資本進みては外資をさへ吸収して、資本主義的開發を進行させよう。」今日かういふ意見がどこかで、依然として支持せられてゐるかどうかを知らぬ。けれども、かういふ方針を是認するか否かは、決して之を北支だけの問題として考へべきではないと思ふ。やはり、日滿支の經濟ブロックを如何なる方向に導くべきかといふ根本の方針が定まつたのち、それに従つてのみ判斷せらるべきであらう。

此場合にも、前に述べたる原則は支配しなければならぬ。東亞民族が人類平等の大義を實現しようとしても、其力は少くも當分、日本民族の上に存すると見る外はない。東亞全體に如何なる經濟的繁榮が實現せられようとも、それによつて日本民族の力が弱まるならば、東亞の地位はそれだけ低下するであらう。そこで此ブロック經濟の性質に思を致す必要がある。

ブロック經濟はいふまでもなく、一の政治的勢力の及ぶ範圍を一括して一の封鎖的經濟を形づくらうとする傾向のあらはれである。けれども、此封鎖圈内に於ける經濟發達の大勢は次の如きものとならざるを得ないであら

う。本國からの商品及び資本の輸出を受くるうちに、外地乃至勢力的範圍の經濟が發展する。而もそこでは勞銀や自然的生産因子が著しく低廉である。技術が進み交通が發達するにつれ、別して本國からの資本輸出の努力が加はるにつれて、諸種の産業は其最も低級なるものから漸次に本國から脱離する。これはブロック經濟の形成なくしても實現しうべき傾向であるが、此形成の努力が進むほど、拍車をかけらるるであらう。此傾向の最も早く實現せられたるものは、英國の農業の衰頹である。次には、印度に於ける紡績業の漸次的發達である。先進國の政治的勢力が必要に應じて之を統制するのなければ、それは早晩先進國の上に種々なる困難をもたらすであらう。かゝる意味に於て、資源と商品（消費財）との交換に終る間は先進國に利潤を確保するにしても、それ以上の交渉、別して資本の投下については、そこに種々なる問題があると思はれる。

まづ、新東洋に於ける農業が如何に調節せらるべきか。經濟原則の支配に放任する限り、内地農業の急速なる衰頹、滿洲國蒙疆に於ける穀作農業の進行は極めて必然のことからである。かゝる事情から滿洲國に於ける米作の許可制となるが如き、已を得ざる對策であらう。滿支に於ける農業の發達は一方、綿花、羊毛等の如き日本工業の原料の爲に、而して特に穀作養蠶の如き滿支そのものの生活を高むる爲に、此二の目的に向ふべきである。その爲には生産や輸出入の統制を強化することも亦已を得ないであらう。日本農民の大陸移動の國防的必要を認むるに於て敢て人後に落つるものではない。けれども、それを實行すると同時に、日本に於ける農村の人口維持はあらゆる見地から見て、日本民族の自衛の爲に缺くべからざることであらう。必要に應じては工費を投じて國內の干拓開墾を行ふことも亦不可ならずと思はれる。

内地からの資本投下についても、亦考ふべきものがある。此資本投下は内地に於て必要とする資源の開発の爲に行はるること、已を得ない。鐵、石炭、鹽、諸種の金屬等につき。並びに農民の生活向上に資すべき條件を作り出す爲の治水、灌漑の設備の如き。けれども、軍需の爲に内地の生産力擴充の爲に莫大なる資力を必要とする近き將來の日本から資本の急速なる輸出を試みようとするのは、困難でもあらうし、又日本産業の爲に考ふべきことでもある。例へば、紡績其他の輕工業の如き、若し資本の進出に努力するならば、全部大陸に移轉して、内地には僅に利潤のみが流入するであらう。或はそれを以て一の必然であるとなし、内地工業の重工業偏重を喜ぶべしとするものがあるならば、それは次の如き危険を思はざるものである。殘存する産業を以て果して内地の増加人口を吸収しうべきや否や。何人も之を樂觀し得ないであらう。その上、重工業は景氣の變動に於ける振幅の最も大なるものであり、従つてそれだけ國民を強く失業の危険にさらさせる。又、今日の重工業は軍需の支柱によつて繁榮を示してゐるが、平時の需要に若干とも復する場合、それによつて果して十分自立するだけの發達段階に達してゐるかどうか、これはなほかすに時日を以てして、はじめて判斷せらるべきことではないか。

政治的には強力なる統制を加ふると共に、他の東亞諸民族の生活は愈々之を高め且つ安固にすること、これが日本と東亞にとつての自衛の道である。漢、滿、蒙の諸民族の生活が著しく低位にある限り、若し技術能力に差等なしとすれば、資本の大陸進出はそれだけ日本の産業を危くする。此意味に於てもこれらの諸民族の生活を高めねばならず、而もこれを高むるが爲に外資（歐米の資本）を入ることが、對立的地位にある大陸産業を促進することになるならば、そこにたゞ一の結論がある許りである。土着の民族資本の活動はなるべく之を抑壓するこ

となく、これに對して必要な限度の統制を加ふることにする外はないであらう。歐米の帝國主義すらかゝる土着資本を壓迫せず、寧ろこれと提携することによつて、支那民族との摩擦を緩和することに力めた。

勿論外國資本の進出については複雑なる問題がある。英佛その他の資本主義國としては百年以前より搾取の絶好なる對象として注目し、莫大なる資本を投下し、又勞費と生命とをつぎこめる所である。日本の勢力の現實を見るにはしても、それならばといつて、直に引き下ることもないであらう。あらゆる手段を以て舊き權益を主張し、それを基礎として所謂門戸の開放を求め新なる投資に努力しようとするであらう。これに對する日本の態度としては、例へば獨伊に對し、英佛に對し、又米國に對し決して一概に論じ去ることを許さぬ別々の事情はあることと思ふが、大體の方針としては、支那民族をこれ以上歐米資本の好餌となさざることではなくてはならぬ。此方針を貫徹し得るものは日本の事實上に於ける力であるが、複雑なる事情に應ずる處置については茲に論及し得るところではない。

各東亞民族に對する文化工作の問題について論じようと豫定したけれども、豫定紙數既に残す所がない。たゞそれに關する結論をのみ述べよう。日本精神は直に支那の民族に移植し難く、三民主義亦支那を亡ぼすものであるとするならば、急に新しき思想を作り上げて之を統一しようとすることも困難である。東亞民族の結束の意識の中からそれは生れよう。而も、之を生むところの力はたゞ實行そのものの底にある。歴史は豫想をこえて躍動する。その間から新しい思想が立ち上らう。(昭和十三年十一月二十日)